1-1 核家族がなにをもたらすのか

◎頼りになる親や相談相手がいない「核家族」

いまの子育てをむずかしいものにしている原因のひとつに、「核家族」があります。むかしの大家族であれば、たとえば子どもが勉強をしないとき、学校に行きたがらないとき、あるいは暴れるとか殴るとかで家庭内暴力をふるうときに、おじいちゃんやおばあちゃんに「まあ、ほうっておけば、そのうちなんとかなるよ」とか、「わたしも5人、6人育てたけれど、むかしもこんなふうだったよ」といってもらえれば、親はずいぶん気楽になったものです。

つまり、子育てがうまくいかずに親が不安になったとき、なかにはおじいちゃんやおばあちゃんまでいっしょに不安になってしまう家庭もあったかもしれませんが、大半の家庭ではおじいちゃんやおばあちゃんが話を聞いて相談相手になってくれたのです。それだけで、親の不安をやわらげてくれる「緩衝材」のような役目を果たしてくれていました。

また、親が子育て本のとおりにやっているにもかかわらず、うまくいかないときなどには「本に書いてあることばかり信じるんじゃないぞ」と、大人の知恵を教えてくれることもあったでしょう。

そういう意味で、おじいちゃんやおばあちゃんは、親の子育て不安をずいぶんやわらげてくれたはずです。

しかし、大家族であれば頼りになるおじいちゃんやおばあちゃんが身近にいてくれたかもしれませんが、核家族になるとそういうわけにはいきません。もちろん、電話をかけて相談することはできますが、おじいちゃんやおばあちゃんも普段その子をみていないという弱みもあります。

いずれにせよ、親身になってくれる気軽な相談相手がいないことが、いまの子育てをむずかしいものにしています。

◎子どもがうまく育つ「伝統的な子育て」

ところで、おじいちゃんやおばあちゃんが教えてくれる「伝統的な子育て」、じつは、これが意外に子育ての結果がいいのです。この点は日本だけでなく、アメリカでも報告されています。

アメリカに、「アイデンティティ」や「モラトリアム」という用語をつくった、エリクソンという有名な精神分析学者がいます。本業は精神分析家ですが、その一方で、ハーバード大学などで文化人類学の研究もしていました。エリクソンは、思春期や青年期に子どもがどのように精神的な発達をしていくかに関する本を書いています。アメリカの人たちはもちろんのこと、一時期、日本のインテリの人たちも彼の本を熱心に読んだものです。

文化人類学者としてのエリクソンの重要な仕事に、アメリカ・インディアンの子育ての研究があります。『幼児期と社会』という本にまとめられている研究ですが、エリクソン自身、そこでたいへん大きな影響を受けたのです。

どういうことかというと、アメリカ・インディアンは、同じ文化をもつ単一の民族ではなく、じつは多くの部族にわかれていました。部族ごとに宗教や価値観などに大きな違いがあり、子育ての方法もさまざまでした。しかもお互い連絡を取りあうこともなかったため、それぞれが独自の「伝統的な子育て」をおこなっていたのです。

その「伝統的な子育て」は、部族ごとに天と地ほどの違いがありました。子どもにものすごい暴力をふるい、谷底に突き落としてしまうようなきびしい子育てをする部族がある一方で、ひたすら子どもを甘やかし、5～6歳になるまでおっぱいを吸わせ

るような超過保護な子育てをする部族もあったのです。

エリクソンは、こうした極端な育て方をされた部族の子どもたちが、いずれも意外におかしくならないこと、案外ちゃんと育つことにたいへん驚きました。なぜなら、彼がそれまで学んできたことと、まったく逆だったからです。

エリクソンの知識では、子どもを殴ったり蹴ったりして暴力的に育てれば、本来なら子どもは絶対におかしくなるはずです。また、5～6歳になるまでおっぱいを吸わせて、甘やかし放題であったとしたら、やはり子どもはおかしくなるはずです。ところが、意